



七〇周年を起点として

石桜同窓会
会長 赤坂俊夫

土井晩翠の作詞した校歌の第三番の冒頭に「大沢川原もとをおく」とあるが、三田義正翁が私学による人材育成をめざして、大正一五年二月一日に母校が大沢川原に創立されて七〇周年を迎えることとなった。

しかも、その動機は青雲の志から津田塾に学んだ義正翁が、意志薄弱な学生を見て、剛健な精神と強靱な身体の鍛練を主とする教育論からの発想であり、企業でも国家においても、その運命を支配する要因は人材なりとの哲学から人材養成の殿堂設立に夢を賭けたという。

次に「わが中学の同じ窓、希望の光身に浴びて」とあるが、同窓の桜が己の理想に向かい邁進し、同時に母校の発展に灯を点ずることこそ大きな希望の華開くことと思う。

終わりの「心ひとしくすやかに、高き遠きにあこがるる」は心身ともに健やかに大きな夢への前進とともに、数々の伝統を誇ってきた母校へのさらなる躍進に憧れの期待を抱くことであると思う。

この七〇周年を起点として在校生の奮起は勿論、職員、岩手奨学会、石桜同窓会が一丸となって、母校の新しい改革と発展に全力を尽くして、人材育成の夢を実現せねばならない。